

第一篇 社会主義の経済的正義

第二章

2—1 封建制が打破された後、何故経済的貴族国が成立したのか

この経済的貴族国については、貴族主義を主張する者でない限り、いかなる者も打破する他ないことを認めるだろう。だから、科学的社会主義は全ての社会的諸科学の原理に立って、根本的革命を主張するのである。そのため、社会主義はこの経済的貴族国について歴史的知識を必要とする。どのように革命によって打倒された封建の廃墟の上に、さらに革命を繰り返すべき経済的貴族国が建設されるに至ったのか。

この説明は、「資本」と「土地」の解釈による。ところが、下等な物質で作られた頭脳の学者は、経済的貴族国の城郭となる資本の説明につき、今なお「勤勉、儉約、貯蓄の結果である」と言って満足している。このような学者は、貧しい家に生まれたことで天理教を信じ、キツネやタヌキを礼拝して一生を終えるという哀れな天性のため、経済史の進行に置き去りにされ、一世紀前の知識にとどまっている者と同じ程度の知識しか持たないのだ。——彼らは個人規模の生産時代の知識で、社会規模で生産活動をしている現代を解釈しようとしている。しかしながら、彼らはすでに十分その任務を果たした者であるから、ただ安らかに永眠してくれればそれでよい。今日の我々は、旧派経済学の死体に鞭を打つ者ではない。例えば、広大な大河の一方所に、水が停滞して数方マイルにわたる湖ができているとしよう。そしてその湖の水面にずる賢いカワウソが小さな頭を出し、「この湖に水が満ちあふれているのは、皆私が川辺から懸命に水をすくってきたからだ。」と言ったとしよう。生き残っている旧派経済学者という者は、「そのとおりだ。これはカワウソの勤勉、儉約、貯蓄の結果である」と言って信仰しているのと同じなのだ。経済学の問題は湖ではなく、川の流れでもなく、水源にさかのぼって疑問を集中させなければならない。農夫の持っている一丁の鍬、大工の持っている一振りの斧は、もちろん彼らの勤勉、儉約、貯蓄の結果であろう。山と川に分かれて働いた、おじいさん、おばあさんの昔話¹の舞台となる時代やアダム、イヴが労働を命じられた時代においては、勤勉、儉約、貯蓄はまさしく資本の源泉であった。しかしながら機械の発明後の資本は、このような個人の労働による資本と流れてくる水源を異にしている。もし一本の美酒を数百人の血液で満たし、赤道直下で働く数万の同胞の涙を集めて、輝く粟ほどの大きさのダイヤモンドを作るといった浪費を満喫させることができず、「一生の苦しみは消費の道を発見することにある」と言われる経済的貴族の資本が、むしろ等比数列の勢いで一年が倍の速度ですぎていくのを勤勉、儉約、貯

¹ 桃太郎などはこれの典型である。

蓄の結果であるとするならば、世界の全ての辞書は直ちにその文字を訂正しなければならない。もし個人の勤労の結果であると言うならば、生まれてから何ら勤労というものをしていない彼ら資本家の資本は、無から有を生じるものである。これは個人規模の生産時代の勤勉、儉約、貯蓄ではない。社会規模の生産を資本家に独占させた略奪の蓄積である。——「資本は略奪の蓄積である」と言う科学の帰結は、生産を社会的に行いながら個人に分配してしまい、生産した社会が分配にあずかれないために生じたのである。カール・マルクスの『資本論』は、大変遠い昔の知識に基づいているため、その枝葉の点で無数の非難を受ける余地があるが、「資本は略奪の蓄積である」と言う大原則は引力説のように不動の真理である。彼が、「品物の価格は需要と供給によって決定されるのではなく、生産に要する労働時間の長さによって定まる」²という価値論を立て、それに基づいてあらゆる議論を建設した。そのため、道端で拾った宝石は一分間の労働に相当する価値しか持たず、数時間の労働を要する机はそれの数十倍も高価であると言うのか。労働時間のない天然の産物には価値がないと言うのか。同一の石炭でも、発掘の困難なものは、発掘が容易な石炭よりも高い価格で買うものであると言うのか。長時間の労働が無用の生産に終わった時でも、短時間の有用な品物よりも高い価値を持っていると言うのか。一時間で釣った一匹の魚と時計職人の一時間と著述家の一時間が同一の価格を持つと言うのか。こうした正当な批評を受けて根底から動揺したため、ついに「資本は略奪の蓄積である」と言う真理さえも埋もれさせてしまったことは事実である。そして今日、社会主義者と称される者の中に、あたかも生物進化論者がダーウィンを偶像としたように、マルクスの『資本論』を信仰簡条³として、今なお「物価は労働時間の長さによって計算される」と論じて満足している者がいることもまた事実でないとは言わない。しかしながら、長い間の十分な研究で磨き上げられた真理は、彼の価値論に大いに修正を加えるとともに、ついに「資本は略奪の蓄積である」と言う経済的貴族国の基礎をしっかりと発見させるに至った。つまり、今は革命で一新された貴族の土地が各国の歴史解釈に基づいて（日本においては幕末の国体論⁴の歴史解釈に基づいて）略奪されたものであると発見されたように、マルクスの『資本論』は経済的貴族の「資本」もまた同じように略奪されたものであることを科学的帰納によって発見したのだ。

そのため、過去の貴族を打倒した革命家が、歴史の叙述において貴族の土地を略奪した跡を明示したように、この経済的貴族国を変革すべきだと考える社会主義は、資本家が略奪した跡を歴史の研究で明示する。水戸の『大日本史』のように、マルクスの『資本論』は経済的貴族が発生し、発達してきた歴史を明らかにする。彼の価値論の誤りを正した後の真理は以下の簡単な一言にある。——労働者の賃金は、需要と供給の原則によって支配

² リカードの説を発展させた投下労働価値説と呼ばれるものである。

³ 「信仰簡条」とは、教義を簡単に要約したもの。

⁴ 原文では「順逆論」となっている。「順逆」とは、帝位継承論争の概念を指し、帝位の継承が正統であるかを問題とすることを「順逆論」と言う。朱子学はこの問題を熱心に議論する学問であり、水戸学が南朝正統論に立つのは、その影響による。なお、著作集第一巻において解説を書く神島二郎は、順逆論を国体論と説明しており、分かりやすくするために「国体論」と訳した。

される。そして人口の増殖は、労働者の供給を過剰にし、機械の発明は（その事業が拡張される時を除いて）労働者の需要を減少させ、賃金の市場価格を労働者自身が食費をようやくまかなえる程度の価格まで下落させる。資本家はこの食費ほどの賃金で労働者と契約し、一日十三、四時間労働させる。この長時間の労働によって得る生産物のうち（必ず注意してほしい。我々は労働の時間そのものを価格としており、「長時間の労働によって得る価格のうち」とは言っていない）、労働者の賃金となる食費相当額を差し引き、残った生産物の有用な価値を需要されることによって生じる価値は全て資本家に略奪される。この略奪の蓄積は資本に転じ、労働者の雇い入れに使われ、さらに大きな略奪を生み出し、雪の塊がころがるように資本を増大させていく。これは、貴族国の萌芽として土豪が発生したことと同じであって、段々と経済的な戦国時代（例えば現代日本のように）になり、さらに厳然として動かない経済的封建制度により、大資本家が合同する時代となる（例えばアメリカのトラスト⁵のように）。

2—2 貴族国の成立を支えるもの——機械工業の発展——

こうした無数の土豪のような小資本家が、わずか一世紀の間にごく少数の群雄割拠となり、厳然とした経済的諸侯となって発達してきた理由は、まさしく近代文明の機械工業にある。経済的貴族国の城郭であると言えるものがそれである。重力により落下するというような物理的な法則によって支配される歴史の進行は、十九世紀になって彼自身が発明した汽車と競争できるほど速い速度で走ってきた。この時代の趨勢の汽車に一足早く乗り込んだ者——いや、多くはある事情のために知らない間に車内に転がり込んでいた運のよい者——が、今の経済的貴族あるいはその先祖である。巧みに機械工業を利用する者、あるいはうまく利用できた幸運な者は、その機械の城郭によって独立の手工業者を圧倒した。そして圧倒された独立の手工業者は、パンを得るためにその独立を維持することができず、戦勝者の軍門に下り、労働者となる。——経済的貴族国の萌芽はこうして培養されるのである。かつて独立の手工業者は、独立した経営により、労働の結果の全てに対して所有権を主張した。今や自己の労働の果実が、食費となる賃金のみを除いて、全て略奪されることに少しの疑いさえも抱かない。そして盗品に対する所有権の神聖を主張する資本家の下でひたすら働く状態となった。この一步の差で汽車に乗り遅れたことによって、どれだけ達者な足で走っても、もはや追いつけないのである。一足早く乗り込めた幸運な者は、略奪した価値の蓄積によってさらに新しい機械を使用し、これを使用できない他より小さな資本家を圧倒する。そしてさらにその新しい機械で資本を増大させ、増大した資本でさらに新しい機械を使用し、さらにこれを使用できないより小さな資本家を圧倒する。圧倒されることでさらに資本は増大し、資本の増大はまたさらに圧倒する力を生む。ここに至って、資本の増大の速さは、勤勉か怠け者か、賢いか愚かであるかにかかわらず、新

⁵ 原文では「ツラスト」となっているが、「合同」という意味からして「トラスト」のことだと思われるので、「トラスト」とした。

しい機械の発明に応じて、数学的な確実さによって進行する。そして新しい機械の発明とそれに対抗することができない大資本家の敗北は、無数の失業者を彼らの門前に集まらせる。——経済的貴族国の土豪らは、ここに征服の翼を張る。失業者は、失業者同士の競争によって賃金の市場価格を動物として生存できるだけの額に下落させ、背後に迫ってくる空腹と妻子の悲鳴は、彼らを餓鬼のようにして奴隷の鉄の鎖を争って求めさせる。初めのうちは少なくとも一家が妻子を維持できるだけの賃金を最低限度としていたが、今や腕力を必要としない機械は家庭の神聖と幸福を詩人と道德家の問題に追いやり、臨月の母と無邪気な子供を捕まえて工業につないでいる。

2—3 資本による土地の収奪とその結末

この経済的な戦国時代の君主らは、さらにその資本で地方に侵略して土地の略奪者となっている。そして土地を略奪して存在する地方の大地主は、その略奪によって得た資本でその版図を拡張している。高利貸しの資本は土地を占領するための弾丸となって働く。日本においては、アイルランドの大地主や革命前のヨーロッパのように、戦争の略奪によって土地を占有した者は、維新革命によってその略奪物を国家に返し、今は権力のない華族として痕跡を残すだけである（だから、社会主義を直訳的な口ぶりで唱え、「土地は戦争によって略奪されたものである」として没収を主張することは、的に向かっていない発砲となるであろう）。日本では、諸侯の所有権の下で小作権だけを持っていた者に国家が権利を付与し、これまでの土地は零細自作農の土地⁶となった（だから、国家が公債の利子を負担して与えた権利は、国家に回復の自由がある⁷と言うならば、多少なりとも論理的であろう）。とにかく日本の土地は、一度戦勝者の略奪の手から離れたことは事実である。けれど、今や新たな略奪者が資本の威力によって土地を併呑し始めている。近年、機械工業が起こるとともに、資本は無限に需要されることで無限の価値を表し、毎年誤算もなく入る——諸外国に類例を見ない——利子の利潤と、猫の額ほどの狭い水田で古くて細々した農業のやり方を用い、一家総出であくせく働いてもなお最低限度の生活を維持するしかないほどの土地のわずかな利益と比較すると、その差はあまりにもかけ離れている。かつて農家の副業として重要な収入となっていた繊維産業なども全て資本に奪われた。地租の負担は、大地主にとっては地代という社会的産物に対する社会の権利であると言えるが、零細自作農にとってはわずかな所有権に対する威嚇である。彼らの多くは、ミツバチのように働いた諸侯の小作人であった農奴の時代と異なる生活をするできないのである。都会人の嘲笑する赤毛布は、嘲笑されるように東京見物の時と鎮守神の祭の時以外には、大事に保存される贅沢品なのである。豊のない茅葺きの家、泥まみれになって破れに破れた衣服を着ての生活は、まさしく中小自作農と言われる農家の一般的な者の日常生活である。もし

⁶ 原文では、「小有土農夫園」となっている。訳語のほうがかえってわかりにくくなってしまいが、文意を壊さないようにしようと思うと、こうせざるを得ない。なぜなら、明治期はまだまだ小作農が多いが、「小有土農夫」は農業で何とか生計を立てているようなので、小作農とは解釈しがたいからである。

⁷ 「もともとは国家が与えた権利なのだから、国家がその権利を奪おうと、それは国家の自由だ。」ということ。

中小自作農と言われる者が、二、三人の子供に中小自作農の名にふさわしい中等教育を受けさせようとするならば、借金をしなければならぬ。敢えて子供の教育に限らなくとも、日常においてさえこのような低い水準の生活を送り、やっとのことで祖先から神聖視している土地を維持している。その彼らが、しばしば襲われる不作、疾病などによって借金生活に陥ると、高利貸しの資本は土地に蛇のように巻きつき、いかに労働に労働を重ね、いかに低い水準の生活がさらに低下しても、土地のわずかな利益は到底資本の高利に対抗できない。そうして高利は高利を産み、その神聖視する土地は数年もたたないうちに都会の資本家、あるいは資本を自在に用いる他の大地主に吸収される。——イギリスで「産業革命」という惨劇を演じて、一瞬のうちに零細自作農を一掃した機械工業は、まさしくこの他愛もない東洋のイギリスにおいて再び産業革命を成し遂げようとしているのである。いかに戦慄するほどの速さで土地の吸収が進んでいるかを統計で見よ。我々は決して、「無知な農業者には文明の輝かしい生活など知らせず、子供に高等教育も受けさせず、生まれた土地に縛り付けておけばよい。」と言うのではない。そうではなく、社会主義はその実現とともに、日本の未開の零細農法などを根本からなくし、大規模農法の機械農業に改めなければならないと主張するのである。しかしながら、この年々数限りなく土地から駆逐されて、さまよう羽目になっている同胞の将来について、単純に「イギリスのように自然と大規模農法に至るだろう」と喜ぶ者は、イギリスの産業革命とまさしく同じ結末という恐ろしい様相であることを忘れていない者である。彼らはどこに行く。老いた父母は、先祖の墓がある土地を離れることが忍びないため、略奪された土地にとどまって農奴となる道をたどる。若い男女は、各々賃金奴隷となって、食べるための職を求めて都会に集まっていく道をたどる。親子がともに暮らすことはなくなり、兄弟や妻子は離散していく。

ああ、農奴と奴隷の日本よ！ 経済的貴族国の下では、彼らはどこをさまよっても農奴や奴隷となる以外に生きる道がないということを知らないのである。土地を追い出された地方の労働者が都会に流れこみ、葬式のあった家の犬⁸のように、奉公紹介所の出入り口の辺りを徘徊するとき、それは落ちぶれて彼らと同じ苦境に立たされている都会の労働者が工場の入り口に掃き出されるときと同じである。ローマの奴隷商人は、奴隷の首に価格、年齢、能力を書いて飼い小屋の中に置き、人がやって来て買うのを待っていたと言う。ところが今日の奉公紹介所は、一日に数百人を数える彼らに対して飼小屋を持たず、食べ物を与えられるものでもない。自由・平等という文字を額に焼き印を押された奴隷は、どんな困難をも我慢しても、まず食いつなぐことに懸命にならなければならない。——経済的貴族国の君主らは、ここに至ってその経済的統治権を振るい、ますます強大になる。職を得た者に対する失業者の競争、失業者と失業者の競争、都会の労働者と地方の労働者の競争。賃金奴隷階級の餓鬼道的な競争は、まさしくむごい限りである。

⁸ 「葬式のあった家の犬」とは、孔子の晩年を象徴化した表現。国政に参与することを望みながら、その機会を得られなかったことを、そのように例えたという逸話を基にしている。『孔子家語』困誓篇にある。

2—4 資本家間の競争とそれによって引き起こされるもの

賃金奴隷間の餓鬼道的な競争（これは完全に行われる自由競争だ！）とともに、他方で資本家間の相殺的な競争はまさに血の河となっている（先に自由競争を二つの階級に従って分類することができると言ったのはこのことである）。

経済学者は、資本家がその家老、家臣を率い、賃金奴隷を招集して商工業を営むのを見て、生産であると言っている。しかしながら、事実の多くはそうではなく、彼らは生産するために企業というものを作るのではない。他の対抗者の生産を打破するために労働を命令しているのである。これは突飛な文字遊びではない。むしろ、戦国時代の群雄が国家の利益と人民の幸福のために戦争したと言うような経済学者こそ、形容詞に富んだ文章を作っているのである。彼らは、大部分を他者の生産を破壊しようとする意志に費やされた破壊費をむしろ生産費と名付ける。——まさしく経済的な戦国時代である。機械の音、金槌の音は戦場の突撃、ときの声⁹であると言える。彼ら経済的群雄は、人情、名誉、高尚な快樂、精神の開發などといったもの一切を忘れ、ひたすら¹⁰戦争に熱狂する。殺伐とした群雄が血に飢えるように、黄金に飢えた彼ら経済的群雄は、暗殺や襲撃で親戚も友人も眼中に映らないのである。戦国時代の群雄が、連合したり、敵情を探ったりするという目的のために、妻や娘の贈与や放棄を平然としていたように、令夫人¹¹や令嬢といった者は資本の連合のために結婚させられ、市場の競争のために離婚させられる。野蛮人の道德家であろうとするには、その資格として殺人、強盗、食人は不可欠であると言わなければならない。それと同じく、資本家階級の道德家であろうとするには、不道德と名付けられたあらゆるものを行って平然としている良心が必要である。彼らは床に就く時であっても、どうやって他人の顧客を奪うか、どうやって他人の工場を倒すか、どうやって他人の一家を倒すかといった計画で頭を悩ませているのである。彼らは夢で悪魔とささやいている。同じ営業者であるということは、彼らにとっては地獄に落ちるまでの仇敵であるということの意味する。もし敗戦者の一家でおちぶれて離散し、年老いた父親が内職のマッチ箱を張り、世間の荒波を知らない若者が安月給のしがない役人になり、かわいらしい愛娘の細い腰に飾るものが何もない状態に至るようなことがあるならば、それこそが彼らの生涯で一番満足できることである。そして彼らは黄色い歯を露わにして嘲笑し、手を叩いて凱歌を歌う。こうした戦闘のために、彼らは特殊な良心を持っている。おごりに満ちた額でも、顧客の前では恥も外聞も気にせず地につけ、利益を与えてくれる役人の足下には罪人のように土下座する。ほらは、彼らにとっては最も高貴な道德である。自己の正直さ、自己の勤勉さ、自分の店の誠実さ、そしてその製品が優秀、抜群であるという虚構から他者の誹謗、排撃に至るまで、まさにあらゆる転倒した道德を奉じている。賄賂、買収、運動、広告、世のあらゆる醜悪な良心によって行なう醜悪な戦闘である（『社会主義の倫理的理想』において階

⁹ 合戦の初めに上げる叫び声のこと。

¹⁰ 原文では「只管」となっている。「只管打坐（ただひたすら座禅に打ち込むこと）」という用法があるように、「只管」には「ひたすら」の意味がある。

¹¹ 「令夫人」とは、貴人の妻の尊敬語である。「令室」とも言う。

級的良心を説いた所を見よ)。そして戦闘は軍事費もないままに継続することはできない。彼らは「生産費」という名目で、経済戦争の軍事費を租税のように社会全体の購入者に負担させる。そして戦闘のために明かりを失った彼らは、各々需要を越えた生産を行い、略奪された社会全体が生産物を購入する力を使い果たすと恐慌¹²となる。恐慌！ この一言は、地震のように戦勝者も敗戦者もともに倒す。いかにロッシャー¹³が、「野蛮な民族だけが恐慌を免れるだけである。だが、恐慌を免れても、彼らは幸福であるとは言えない。」と言おうとも、またリカードが、「恐慌を嘆くことは、金持ちが満載された貨物船が嵐に遭うことを恐れ、貧民が安全を願うという筋違いの愚を犯すことと同じである。」と言おうとも、それは野蛮人も知らないような悲惨な爆発を起こす。そして、まさしく社会全体を船に載せて難破するように、数年の蓄積をわずかな間に一掃してしまう。そしてこれは必ず十年ごとに来て、もっと小さいものはいつも至る所で起こる。そしてジェヴォンズはその責任を太陽の黒点に求める¹⁴。——この経済的戦国時代のわざわいを受ける者は、かつて戦乱の下にいた百姓・町人のような労働者と社会全体である。それなのに、全ての経済学者が彼ら企業家という者の定義をする時、皆必ず「企業家とは、自己の計算、自己の責任において労働者を雇用し、生産に従事する者である」と言う。自己の計算と言うものが、空虚な誤算と自分だけの利益を収める計画のことであるならば、十分真理であると言えるし、生産に従事するというところまである程度までは偽りではないだろう。しかしながら、「自己の責任」と言うものは怒るべき欺まんである。彼らはいつその責任というものを尽くしたことがあったのか。利益を自己の責任において負担することは都合のよいことであるから事実である。けれど、需要と供給が世界的な経済規模に拡大される時、初めから暗躍していたにすぎない彼らの無謀な計算によって発生するあらゆる損失、困難、わざわいを負担する者が、労働者と社会全体であることを知らなければならない。略奪の蓄積にすぎない資本の喪失は、彼ら冒険者にとっては本来の裸一貫に戻ることである。しかしながら、工場の閉鎖によって生じる労働者の失業、失業者によって社会がこうむる危険と動乱と「自己の責任」は別問題であると言ったほうがよい。愚かさや残忍さを体系的に組織したものにはすぎない経済学は、失業者などは小さな活字で片隅に葬ってしまう。けれど、一人の失業者が出れば、老いた母は首をつり、妻は貧血で苦しみ、娘は売春婦になる。そして彼自身は「犯罪をなし得る危険な状態」でさまよい、ますます食いつなげなくなって飢え、とうとう一銭の窃盗犯となり、さらに強盗殺人犯となる。戦国時代のため、敗戦者が一人生まれるごとに、社会の下層はまさしく犯罪階級と化していくのである。そしてこの犯罪者によって害される者は、猛犬と壁の門を持つ上層の犯罪階級——詐欺、賄賂、横領、投機、政治の罪悪によって安全な設備を持つ邸宅に住む犯罪階級——ではなく、備えを持たない中産階級

¹² 原文では「恐慌」となっていて、[ママ]と注記されている。文脈から考えて明らかに「恐慌」の誤りである。

¹³ 原文では、「ロッセル」となっている。ドイツの歴史派経済学者のヴィルヘルム・ロッシャー (Wilhelm G. F. Roscher) のこと。

¹⁴ ジェヴォンズとは、William Stanley Jevons のこと。効用理論で名高いイギリスの経済学者。景気変動は太陽の黒点の周期と同じく、十年周期で訪れると主張した。

と労働者階級である。彼らは上層の犯罪階級のせいであらゆる生産を略奪され、生産物の購入に際して軍事費を課税され、競争の敗戦者が生む失業者によってさらにわずかな残りの部分を脅かされる。「自己の責任」とは、企業家一人が減びることで抹殺されるものではない。

2—5 資本家同士の競争がいずれは停止する理由

しかしながら、この資本家間の殺戮合戦は、近い将来に完全に停止するものである。アメリカ合衆国などは既にほとんど停止し始めている。彼らが小企業家を倒し、大企業家を倒し、より大きな企業家を倒して進む間に、彼らは数十の戦勝者と対抗し合っていたことに気づいた。——経済的戦国時代は、経済的封建制度に至る歴史的過程である。資本家は道徳についての良心の感覚が非常に鈍いけれども、利害については驚くほど鋭い耳を持っている。目覚めてから黄金、黄金と言い、寝るまで経済、経済とささやいている彼らが、実力の似通った者同士が争うことが大きな損失をもたらさずに終わるものでないことに気づかないはずがない。広告によって数千万円の費用を使い、競争によって物価を下落させるよりも、最後まで踏みとどまった大資本家同士が合同するほうが、経済的には当然の成り行きである。これがトラストである。そして他方で、競争し合う労働者もまた強固な労働組合を組織し、二つの階級は階級間の自由競争を停止する。

経済的な戦国時代にある我が日本においても、近時トラストの声が次第に高くなってきた。おそらく今後十年たてば、アメリカ合衆国のような厳然とした経済的封建制度ができるだろう。資本家の歴史がこうして封建制度に入ると、大名階級は連合を組んで社会全体を抑圧し、極めて強固な土台の上に築かれることで社会全体に権力を振るい、厳しい取り立てを始めるであろう。彼らは大合同によって経済的節約と新しい機械を応用する自由を獲得し、原料の安価な買い入れ、一切広告競争が不用となることなどで、驚くほど利潤が増加するだろう。それによって余剰が分配されるか、もしくは物価を下落させることにより、社会全体を経済戦争から免れさせることは事実である。だから我々は皮相的な見解を持つ者のように、むやみに嘆いて「トラストが物価を上昇させる」と論じる考え方に賛成しない。統計は、明らかにトラストが小資本家の乱立する時代よりも物価を下落させ、社会を幸福にしているという事実を示しているからである。しかしながら、トラストによる厳しい取り立てもまた統計の示す所である。なぜならば、それはトラストだからである。経済的封建制度だからである。封建制度は戦国時代よりは戦争のわざわいがなくても、封建制度での厳しい取り立ては、それが封建制度であることにおいて言うまでもない事実である。もし経済的諸侯が永久に賢明である、または賢明な者だけであるならば、社会の購買力を計り、物価を下落させることにより、仁徳のある君主として崇拜されるとともにずっと血液を搾り取るのが安全な方法である。過去の貴族らにもこうした非常に巧みな知恵があった。しかしながら、彼らの多くは馬鹿大名であるように、制限のない絶対的な専制権力にはおごりと暗愚が伴うものである。経済界において専制権力を持つトラストは、

生産が社会の購買力によって維持されるものであることを顧慮しないため、物価のひどい上昇が次々に起こる。このために起きるあの生産過多——イリーが言う消費不足のため、依然として経済界が混乱する有様——は、その例を今のアメリカを見出せ。経済的貴族国においておごりと暗愚のために倒れる諸侯と、そのせいで生じる百姓一揆は、当然の現象である。——トラストはまさしく制限のない専制権力を持つ封建諸侯である。彼らは人類ののどに対して支配権を持っている。トラストにとっては、売買を保護する私法というものが変化し、明白な公法となる。法律学者が言うように、「公法とは権力関係を規定し、私法は平等関係を規定するものである。」「権力関係とは強者の意志と弱者の意志の関係であって、命令と服従の関係である」というものであるならば、人類の物質的生活に対して一切の権力、思いのままの絶対的な専制権力を持つ彼らトラストは、真の意味での統治者ではないのか。対等な意志による売買ではなく、この統治者が物価を命令し、消費者となる社会が服従するという明白な統治関係である。彼らは売買という名の下に、社会全体から租税を徴収する真の経済的貴族、経済的家長君主である。しかしながら、貴族制度が国家主権の公民国家に至ったように（『いわゆる国体論の復古的革命主義』を見よ）、経済的封建制度もまた決して経済史の最後を締めくくるものではない。彼らがトラストの大合同をしようとする、無用もしくは利益の少ない工場を閉鎖し、工場によって成り立っている都会をトルコ人のように破壊する。また、際限なく発明される新しい機械を使用するたびに、数万の労働者を失業者として社会に追いやる——失業者のある者は、軽蔑に満ちあふれた慈善家の微笑に迎えられ、社会は監獄の鉄の扉を地獄のように開けて待っている。切迫は労働者を尊い諸侯に対する反乱にかき立てる——あたかも封建時代の百姓一揆のように。彼らは大団結をして、数十日、一ヶ月以上にわたるストライキをして百姓一揆を継続する。ストライキに次ぐストライキ、工場の閉鎖に次ぐ閉鎖、これによりアナキストは飛躍し、労働者の飢饉は暴行を生み、ついに警察権を濫用する口実となり、さらに軍隊の発砲となり、まさしく痛ましい市街戦を演じる。

川の流れは流れる所に流れるものである。ナイアガラの滝はオンタリオ湖に落ちるためにとどろき、社会全体は社会主義に落ちるために沸騰する。しばしば繰り返されてしばしば敗れるストライキの百姓一揆がついに政権の上に現われてきて、「社会主義」の旗印の下に人々が集まる時、経済的貴族国は打倒され、維新革命の断崖から勢いよく流れ落ちる。

2—6 権利思想の変遷

革命の発火点は権利思想の変遷にある。だから、社会主義は徹頭徹尾権利論によって立ち、少しの調和、折衷も許さない。社会主義でありながら権利を前にして臆病になるようなことがあれば、社会と国家が秩序と安寧幸福の名において社会主義を十字架にはりつけても、涙を流す弟子は一人もいないはずである。

現在社会主義を審問し、裁いているのは、所有権の神聖という金の冠をかぶった個人主義である。しかしながら個人主義よ、社会主義は君がかぶっている金の冠そのものからし

て略奪物であることを示しているのだ。金の冠は侵してはいけない。所有権は神聖である。しかしながら、単に所有権は神聖であるということなどは、内容のない文字であって、所有する理由によって神聖な権利が帰属する所が違うのである。マルクス以前の空想的社会主義のように、資本家階級の所有権を認識し、ただ神に救いを求めて涙を流しても、厳格な権利は冷笑するはずである。科学的社会主義は、自ら金の冠をかぶって全ての者の上に立ち、神のように裁きを下す。

中世の貴族国時代においては、「予は予の力で天下を取った。王となろうと思えば王に、帝になろうと思えば帝になれる。」と言った権利の声¹⁵があった。しかしながら、維新革命は国家主義の権利でさかのぼってこれを否定した。これは占有説と言われるもので、征服と略奪によって国を建てたローマが、占有の論拠¹⁶として十二個の銅柱¹⁷を建てたような例がこの立場である。これは古代、中世における全ての民族に共通している権利で、日本民族の祖先がこの国土を略奪して権利を設定したような例がこの立場である。腕力が所有権を確定すると言っているものもこの立場である。この権利思想は長い間継続していた。ヨーロッパにおいてはフランス革命以前まで、日本においては維新革命まで、土地の所有権はこの占有説によって国王、貴族を神聖にしていた。しかしながら、土地に対する本来の占有者は、決して一個人ではなく、民族全体の発見による占有である。そして占有によって得た所有権は、占有することができないことにより、所有権の理由を打ち消される。死体が墓の中から腕を伸ばして占有を継続することはできないので、相続権などは占有説によっては解釈できないことになる。そのため、占有説を今日も唱えようとするならば、相続によって生じる財産と財産を相続させようとする理由を自分の論理によって暗殺することになる。いや、これこそが国王、貴族が土地所有権を打破された理由であって、革命前後は個人主義の労働説で所有権を説明するようになった。この説が、「労働によって生じた収益はその労働をした個人の所有物になる」という明白な理由は、遊牧時代から農業時代に入り（一面で他の民族に対して主張している占有説とともに）、民族内の個々の間で個人労働による収益を無視しようとする者に対して生産を保護したことにある。そしてこの労働説による所有権の要求は、中世の封建諸侯の略奪に対して市民の商工業を保護し、さらに占有説によって立つ国王、貴族の土地所有権を打ち消すために唱えられた。あの革命の大爆発の中で、略奪によって得た彼らの土地財産を打倒したものは、まさしくこの「労働によって生じた収益は労働をした者の所有物である」という労働説が占有説の略奪を否認したことによる。どうして地代資本のような社会的な産物を占有という名において略奪するために、労働説の個人主義を所有権の神聖という語で飾って唱えるのか。個人規模の労働

15 第四編で、豊臣秀吉が言った言葉として再度引用されている。

16 原文では「論墟」となっていて、[ママ]と注記されている。おそらく「論拠」のことであろう。「墟」は適切とは言いがたいので、本文のようにした。

17 「十二個の銅柱」とは、十二表法のことを指していると思われる（十二表法は、十二個の銅板に記載して公布されたため）。十二表法は、古代ローマの基本法典で、訴訟手続、家族関係、相続、契約、物権、犯罪、不法行為、公法、宗教法を規定している。世に名高いローマ法は、この十二表法を基礎にしている。もともと、ローマ法は公法の発展が未成熟であった。

働によっていた個人の所有権を神聖視する時代は歴史に葬られた。社会規模の労働をする今日、社会の所有権だけが神聖である。所有権の神聖というような言葉は、むしろ社会の権利を神聖であると言う社会主義者にとっての金の冠とも言える。

2-7 社会主義を批判する者の論理矛盾

社会主義は、社会が社会の労働によって生じた収益に対して所有権の神聖を唱える声である。それなのに、機械の公有化に対して「所有権を無視している」と主張するとは何とことであろうか。もし誰かが働いて生み出した収益であるにもかかわらず、私の占有していたものは私の権利の及ぶものだというならば、それは腕力で所有権を確定していた近代以前の権利思想である。人類を鎖と鞭によって占有するから、奴隷の廃止は所有権を無視していると言うのと同じ議論なのである。個人主義を主張して社会主義に対抗するならば、個人主義の権利論に依拠すべきである。そして所有権は労働をした者に属するという正義はまさしく個人主義の法律の理想である。それならば、機械の公有化を労働説に立つ個人主義によって否定したいのであれば、権利を主張できる者はワット以下の発明家の子孫でなければならない。単なる排泄という労働以外に何もしない資本家は、労働によって生じる収益である汚い物質に対してのみ神聖な所有権を得られるのだ。いや、機械そのものが労働の限界量を定めて分割できるものではなく、一つの蒸気機関におけるワット個人の功績は、その機械を組み立てるために用いられた全知識の百分の一、千分の一にも満たない——だから個人主義は間違いなのである。法律の理想によって円満な所有権を真に主張し得る者は、それら個々の発明家でなければ、それを占有する階級にあたる資本家でもない。またそれを運転している階級である今の労働者でもない。歴史的に継続している人類が混然として一体となっている社会だけが主張できるのである。機械は歴史の知識の集積によってできた結晶物である。機械は死んだ祖先の霊魂が宿り、子孫から愛されるために働いているものなのである。愛する子供たちの大多数が地獄の苦しみを味わっている中で、二、三の悪知恵の働く子供が野蛮な時代の権利思想で占有を主張するとしても、今日の正義はむしろ社会規模の労働によって生じた収益である資本に対して、所有権の神聖の名において公有化を唱えると言っておこう。

社会規模の労働によって生じた収益に対する社会の所有権は、地代についても主張される。誰もが知るように、リカードの地代法則が地代を人口が増加した結果と社会文明のたまものであると示していることは確定された事実である。もちろん、後世の学者によって十分指摘されていることだが、耕作の限界値の変化は、彼の言うように、時代に応じて素早く変化するものではないだろう。小作料などは、多くの既存の慣習、慣例によって変化を妨げられ、法則に従って上下するものではない。外国米¹⁸の輸入、外国の土地の開墾などにより、その法則が法則通りに働かないことがあるだろう。彼は、産業革命前のイギリス¹⁹

¹⁸ 当時、台湾において米の生産が行われており、日本はそれを輸入していた。

¹⁹ 原文では「旧世界の英国」となっているが、本文ではその意を汲み取って訳した。北は、産業革命以前と以後で世

に生まれたため、土地は肥沃な所から順にしか耕作されないと考えており、全く反対の現象を示している新興国²⁰のことを考慮していない。そのため、リカードの地代法則は実際上の根拠が弱かったと言える。つまり、彼は他の多くの働きをする社会的条件を忘れ、旧派経済学が抽象論に走るという弊害の先例を作ったとの非難は十分に理由がある。しかしながら、こうした欠陥を持っているにもかかわらず、彼のように考えることによってしか地代を説明できないことは、一般に学者が否定しない所である。もちろん我々は社会主義者という名が示すように、旧派経済学に無数の誤りがあると認めるのであるが、彼のような方法で地代を考えることができると思っている者でもある。——穀物の市場価格は最も多い生産費によって決まる。このような生産費の差額²¹は、土地の肥え具合と市場への出荷の容易さによって生じる。こう多くの生産費を必要とする劣等地を耕作させるに至ったのは、人口が増加したため、穀物の需要が高まったためである。そうであるなら、今生産費の差額を全て土地所有者に払い、土地を借りて耕作に従事しても、劣等地を耕作するのと同じ利潤を得られるはずである。これにより、生産費の差額は常に全て地代となる。そして人口がますます増加すれば、さらに多くの生産費を要する劣等地まで耕作の限界値が下がり、それが低下すればするほど生産費の差額を増やし、それだけ地代を増加させる。だから、現在の小作人が多額の地代を地主に払うのは、まさしく現在のように増加した人口がそうさせているからなのである。増加した人口と働かずに食べる地主との間に何の関係があるのか。まさしく人口が増加した結果である地代が、所有権の神聖という名の下に全て地主に略奪されているような事態は、個人主義の権利思想に背いている。

都会の土地の地代は、まさしく明白な社会文明のたまものである。停車場が設けられ、その付近の地代が増加することは地主の所有を神聖化する理由とならない。交通の発達による地代の増加の場合、蒸気と電気がそれを獲得すべきであって、立ち退きを叫ぶ地主の労働によって生じた収益ではない。東京市²²の地価が将来暴騰するのを見越して土地を買収している金持ちたちは、将来の発達によって東京市が獲得するものを現在のように働かずに食べながら略奪する権利を持っているのではない。地主はいかにミミズのように一升の土を食べて脱糞しつつ、銀座の街をはっていようとも、一升の土を一升の金に変えてしまう消化器を持っているのではない。——フランス革命の時代の権威であった所有権の神聖は、今やむしろ社会が主張すべき正義であって、地主は占有によって行う略奪者である。

我々はここで、世にある無数の私有財産権の弁護論については、うるさく語らないつもりである。労働説によって機械を私有するべきでないことは上述の通りであるし、また占有説に基づいて土地を所有する理由がないことも上述の通りである。しかしながら今日の土地は、たとえ地代だけが社会的産物であるとしても、土地そのものはかつての貴族のように略奪によって占有されるのではないから、なお上記の諸説によって所有権そのものを無

界は一変したと考えていたのだろう。

²⁰ 原文では「新開国」となっている。おそらくアメリカのことを指しているであろう。

²¹ 生産費の差額とだけ言われるとわかりにくいですが、収益と生産費の差額のことである。

²² 当時は、東京市と呼ばれていた。

視するべきではないと論じる余地がある。これに対しては、ある者は盗品の売買は無数にある²³と言って反論し、またある者は我々が先に説いた高利貸しの資本家による土地の侵略に対して異議を唱えて打破することができる。しかしながら彼らは、加工説というものにとどまって対抗を試みている。加工説は長い間の勤労が今日の土地に加えたということを根拠にするのである。しかしながら、このような根拠の弱い議論は、その加工と言っているものが村落で共有している土地²⁴に対する小作権にすぎなかったことを忘れて議論である。また、著述家が生涯の全精力を注いで書いた著作権でさえも時効によって消滅することを知らない議論である。土地の表面の一フィートをかき乱したにすぎないごくわずかな加工が、どうして天空から地軸に達するまでの所有権を確定できるだろうか。また数百年たっても絶えることなく続き、時効が来なくて済むだろうか。資本家の持っている円山応挙²⁵の掛け軸に下手な絵描きが白の絵の具を一はけ塗りつけて、「これは私のした加工である」と言うならば、資本家は絵描きの所有権の主張に従うだろうか。この地球は地主の奇蹟によって六日間で創造されたものではない。

2—8 社会主義の権利論

しかしながら我々は断言する。このような議論は、個人主義時代の根拠のない思弁的な独断による権利論であることでは同じであると。権利とは社会関係であり、社会と社会の間、もしくは社会の構成員と構成員の間において意志を発動する際に限定を付す境界線である。人類と神との間は宗教が支配し、人類と他の動物との間は生物学が支配している。だから、人類の社会関係となる権利の説明をするにあたって、神を雲の間から引き下ろして天賦の権利を唱えたり、人類は生物であるから生存の権利があると言ったりすることは、その形式においては社会主義の理想に類似しているが、完全に個人主義時代の革命論である（今日社会主義者に混ざっている個人主義の革命論者は、今なおこのような権利論を唱える）。だから我々は、個人規模の生産時代の権利思想で今の制度を弁護しようとする者に向かっては、次のように言うべきである。上述のように、個人主義の諸説がかつて貴族国に対してしたように、この経済的貴族国の根拠を覆すに至るであろうとの道筋を示しておくが、真理によってのみ発言と行動をなすべき社会主義は、誤った個人主義時代の天賦人権論によって社会の所有権を建設しようとするものではないと。つまり、この経済的貴族国に対しては、社会主義も個人主義もともに同じ側に立っている立場であるが、社会主義はあくまで社会主義であって、根拠のない個人主義と同一視されるべきではない。だから、個人主義の経済学が再び繰り返される必要のある革命を指導する革命党である他ないように、この権利論の問題においても個人主義の法理学は、経済的貴族国に対して弁護者となるものではないということを理解すればよい。社会主義の権利論は、議論の基礎

²³ この反論の趣旨はよくわからない。とりあえず原文通りに訳した。

²⁴ 法的には、このような共有の多くは「総有」と呼ばれ、共有された土地を入会地と呼び習わしている。

²⁵ 原文では「応挙」としか書いてないが、絵に関することで「応挙」とあれば、円山応挙のことと考えられる。よって訳文ではそれを明らかにした。

を単に観念上でしか思考できない原子的個人に置かず、社会を利益の帰属する主体とするのである。だから、もし「利益」と言う文字を国家社会主義者²⁶のように、一時的な処置、または目先の眼前の政策というような粗雑な意味に用いず、社会という生物（『生物進化論と社会哲学』を見よ）が生存進化の目的に適合していくための手段という意味に解釈するならば、社会関係はその目的に適合する手段として変遷し、関係を規定する権利はその変遷に従って進化する。だから、原始的平等と村落共有制は、平和な原人社会においては社会の目的に適合した社会関係の規定であり、平等と共産がその当時の権利であった。ところが、人口が増加した結果、遊牧時代になって人々はさまようようになった。さらに農業時代に入って土地をめぐる争うようになると、その社会が生存する目的のために、他の村落を排斥し、土地を占有することが権利としてその時代の正義となった。そしてこうして他の村落に対しては、腕力の正義によって権利を認めさせるとともに、その村落内部の構成員間では牛は羊を放牧し、農作を営むなどの労働に伴う収益に対する権利として私有財産制が設定された。つまり、略奪による土地の占有も、ある時代においては権利であって、私有財産制度もまたある時代が来るまでは正義であった。しかしながら社会の進化とともに、新しい正義は古い権利を破って進む。かつて十分に正義を体現していた占有の権利思想は、個人主義の権利思想である労働説によって打破された。そして今や個人が最終目的であるとする思想は、社会が利益の主体であるという新たな正義によって打ち消された。社会主義の権利論は、社会が利益の源泉であり、利益の帰属する所であるという根本思想によって個人主義の権利論を排する。

だから、社会主義は徹頭徹尾権利論によって立つと言えるが、その権利概念は独断的な正義の理想に憧れて社会の利益を無視すると言われるようなものではない。社会の利益は即ち権利であって正義である。それならば、正義と権利の名において土地、生産機関の国有化を主張する社会主義は、社会の生存進化の目的に適合する利益と言えるか。

²⁶ 北一輝は、他の所でも国家社会主義に対して否定的な評価を行っている。このことと後年の彼がとった行動との関係をどう捉えるかは、政治思想史上の大きな問題である。